

「神は小さなものの内に」

(マタイによる福音書13:31-33, 44-49a)

どんな大木も、元は小さな種です。それが時間をかけて育ち、大木になります。今日のからし種のたとえ。神はゴマ粒よりも小さなからし種を、大きな木に育てます。神は小さな種に力強さを与えるのです。ここに神の御心と言いましょか、神の計らいを感じます。神はわたしたちにとって、小さく、力なきものに思えるものにこそ、心を留められ、ご自身の思いを注ぎ込まれるのです。今日のみ言葉の最後は終末の時のダイナミックな神の力が表されていますが、その大きな、強力な力がぎゅっと小さな種に込められている、そのような印象です。それゆえ、わたしたちは小さなものを通して、神のを知ることができます。なぜなら、小さなものにこそ、神の御心、思いが注がれているからです。すごい話しです。天国はどこか遠くにあるのではなく、この世界のからし種やパン種ほどの小さなものを通して表されるということです。思い返してみてください。福音はベツレヘムという「小さな町」で生まれた「幼子」によって語られ、天の国はたった五つのパンと二匹の魚によって表されました。福音はこのように、小さなものを通して語られ、また示されるのです。

それゆえわたしたちの目は、主イエスが指し示す小さなもの、空の鳥、野の花に集中するならば開かれます。そして「その開かれた目で、耳でこの世界に生きるなら、あなたがたは、天の国の秘密を知ることができる。」と主イエスは言われています。主イエスの指先に示された小さなものは、神の国へ広がっているのです。「点」ほどのものを見つめることから、天の国が開かれます。

主イエスはさらに別の箇所「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい」「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であった」といわれています。小さなものへ集中することからさらに、小さなものに忠実であることを求めているのです。なぜなら、「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に気をつけなさい」と言われるように、小さなものに躓きが隠されていることもあるからです。からし種ほどに小さなものから、わたしたちは、神を知ることができます。けれども、全く逆に、小さなつぶやき一つに人は惑わされ、隣人への不信感を抱いたり、神を見失ってしまうことがあります。ちょっとした一言が潮目を変えることは、わたしたちの日常でよくあることです。誰かのつぶやきが、人を励ますことも、その逆もあります。

主イエスは弟子たちに、「目を覚ましていなさい」と繰り返し伝えます。主イエスに従うということは、「目を覚ましている」ことなのです。小さな存在にこそ、主イエスは共におられ、神のみ心は注がれているからです。「目を覚ましていなさい」という主イエスの声を聞き続け、「小さなもの」への眼差しを失うことなく、互いに祈り合い、励まし合いながら、歩んで行くことができますように。